
右手から雷を出そうとしたら異世界にトリップした

そらっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右手から雷を出そうとしたら異世界にトリップした

【Nコード】

N0836Y

【作者名】

そらっち

【あらすじ】

彼の何が気に入らないか問われれば、まず第一に“擬態”が恐ろしく下手なこと。歪んだ人間が擬態せず溶け込めるほど、この世界を席捲する“空気”は優しくない。

第二にそれらについて何ら関心を示そうとしないこと。それが私をひどく苛立たせ、第三に当たる、彼の前で私の擬態が剥がれてしまうことに繋がる。

まったく、もう少しでいいから空気を読んでほしい。それとも、彼はこう思っているのか？ 『この世界のほうこそ、自分が居るべき

世界ではない』と。

なんて痛々しい。そんな願いはファンタジーだ。幻想の類は心の中で押しとどめておくべきだ。

……なんて思っていたのに、悲しいかな、この物語は剣と魔法が蔓延るファンタジーな御話だった。いま、私は彼と連れ立って異世界を旅している。あと少しで中学二年の夏休みを謳歌できる、といったところで、私たちはこの世界に迷い込んでしまった。私の人生の歯車はいつたいてどこで狂ってしまったのだろうか？ 彼曰く、『ごめん、右手から雷を出そうとした』だそうだ。意味わからん。

***習作として書き始めました。遅筆ですが、お付き合い頂けると幸いです。また、割と頻繁に大幅な改訂を行いますので、物語が遅々として進まないこともあります。ご容赦頂けると幸いです。

by そらっち

俺たちの戦いはこれからだ

魔法が使える世界。

そんな世界が存在するのだから、きつとこんな光景が生み出されたことも、それは不思議でも何でもないのだろう。

走りながらそんな思考に気を取られた少年は、しかし、付近で起きた爆発によって、頭の中を瞬く間に危機感へと塗り替えられた。ついでに泣きたい気持ちも付加された。

喉の奥から飛び出しそうになった悲鳴を、寸でのところで堪え、少年は疾走し続ける。

再び、近くで爆発が起こった。10メートル程手前の地面に魔法が着弾したためだ。爆風とそれに乗ってやってくる塵に怯みながら、それでも彼は足を止めなかった。止める間もなかった。

通り過ぎざま、着弾地点に目を遣ると、その部分だけ直径50センチ程の陥没が形成され、褐色の地肌を覗かせていた。その様は少年に嫌でも最悪の想像を喚起させる。

頬を引きつらせ、膝下10センチ程の高さで生え茂る草花に、足を取られまいと、重くなった両腿を必死に上げ下げした。動悸は激しく、それは彼が正常な呼吸法をとくに忘れ去っている事実を、顕著に表わしていた。

短い間隔で浅い呼吸を繰り返しながら、少年 佐倉光太郎は剣と魔法の世界に憧憬を抱いていた過去の自分、その残念なお頭を殴りたくて仕方がなかった。

半分泣きべそをかきながら、魔法の豪雨を掻い潜るように走り続けるこの少年。実は魔法を体感し得ない世界で生を受けた人間だった。

彼が天寿を全うするはずだった世界において、魔法は空想世界の

産物であり、ましてや、その空想が現実干涉するなどあり得ないお伽噺だった。いや、もしかしたら、ただ見落としていただけで、実際には魔法社会というレイヤーも存在していたのかもしれない。むしろ、そうあって欲しいと願ったこともあった。しかし、願いはするものの、それが都合よく自分の現実に顕れるなど、佐倉はまるで信じていなかった。

いつか悪の組織に追われた美少女が自分の前にやってきて、何か特別な力を与えてくれるんじゃないか、と妄想することはあったけれど、それはあくまで妄想の範囲内の話。彼の妄想がその領分を逸脱し、現実を闊歩することなど、当の本人だって信じていない。

いや、信じていなかった。

少なくとも、彼が己の世界で過ごした僅か14年、なれど、彼が歩いてきたすべての中で、魔法なるものと触れる機会など終ぞ訪れなかったのだから。

時に、そんな佐倉少年は、現在戦場のど真ん中を颯爽と駆け抜けていた。

視界の中で炎と水の塊が縦横無尽に飛び交う、そんな視覚メディアでしか遭遇し得なかった戦場を、スタントマン顔負けの度胸で駆け回っていた。

（なんだろう。いったい何が悪かったんだろう）

飛んでくる無慈悲な砲撃に気を配りながら、佐倉は自問自答する。いったいどこで自分の歯車は狂ってしまったのだろう、と。

あれだろうか。自室でこっそり、右手から雷を出そうと試みた、あれがいけなかったのだろうか。鏡の前で黒い手袋を嵌めてポーズを決めた自分に酔いしれていた、あれがいけなかったのだろうか。

実際に雷など出ないと理解していた。理解していたが、その時の佐倉は雷が出したかった。体内に備蓄した電気が云々と色々と理屈

をこじつけて雷を出したかった。

火は暑苦しい印象で、冷静な自分には適さない。水はなんか地味な印象を受ける。なので雷を出したかった。風もよかったが、雷のほうか、なんか、あれだった。クールで尖がっている気がしたからあと、漫画に出てくる、主人公の親友で実家が暗殺一家のあのキャラクターも、雷を武器に闘っていた。あのキャラクターが好きだったから、雷が良かった。

だからといって、雷を使って悪漢を感電させたい、とかそういうのではない。佐倉は雷を使って対象物を斬りたかったのだ。

雷に斬るという性質があるかどうかは大して重要ではない。大切なのは、彼が雷を使って斬る、という行為を夢見ていたことだ。渴望といっても差し支えない、と佐倉本人は思っている。

そういえば、紫電一閃という四字熟語があった気がする。意味は分からないけれど、雷を使えるようになったら、そういう名前の必殺技があってもいいかもしれない。

そんな香ばしい、しかし思春期を直走る人間にとって日常という地肌に潤いを保つ大事な栄養ドリンクであるその妄想こそが、この状況を作りだした原因かもしれない、という考えに佐倉は行き着いた。現状を鑑みて、その推理が妥当、いや至当と言えるだろう、と。

以上の内容を僅か数秒間で展開してみせた彼の脳内を、10人のモニターが観賞していたとしよう。その10人は間違いなく、彼が冷静さを失い恐慌していることに気づくだろう。しかし、行き場のない感情は、時に無理やりにも矛先を向ける対象を作りだす。そして、それはこの少年も例に漏れず、彼のささくれ立った感情はおかしな方向へ向かい、迷走し始めていた。

その時、耳元でつんざくような金切り声上がり、佐倉は我に返る。

「佐倉君、後ろ、うしろ！」

悲鳴が多分に配合された台詞とほぼ同時に、背後から轟音とそれに伴う衝撃波が襲いかかってきた。

爆風に背中を押され、前のめりに倒れそうになる。しかし、歩幅を広く取ること、半ば強引にだが、足を止めることなく体勢を整えることに成功した。

「大丈夫？」

再び、耳元で声がした。ハンドベルを鳴らしたような綺麗な高音が、心配そうな色を載せて佐倉の耳に入り込んでくる。騒音にかき消されそうな音量も、ほとんど耳に触れそうな距離から発せられれば、拾い上げることは容易だった。

「大丈夫。それより、そっちこそ、平気？」

佐倉は喘ぎ喘ぎしゃべりながら、半ベソだった顔に無理やり笑みを灯した。声の主から僅かにいぶかしむ気配が届いたが、今の彼にそこまで気を配る余裕はない。やせ我慢で笑顔を取り繕うことが精々だった。

「うん。平気だけど」

佐倉が着てるワイシャツの、その襟元にしがみ付いた、手のひらサイズという形容に過不足ないほど小さな『同級生』は、申し訳なさそうに言葉を続けた。

「あの、本当にごめんね」

彼女の台詞を聞いた途端、佐倉はやせ我慢でなく、小さく笑みをこぼした。

また近くに魔法が落ちてきた。今度は小さな悲鳴を受信した。爆風から彼女を守るよう手を翳す。

「あ、ありがとう」

控えめな謝辞が聞こえてくる。至近距離でもうつかり拾い損ねてしまいそうな、かばそい声に、普段の彼女とギャップを感じてしまう。少し調子が狂う。

「落ちないで、くれよ。今は、洒落にならない」

「うん」

「落ちても、探さない」

「お、落ちないから！」

彼女の声に張りが戻ったことを確認し、佐倉は意識を切り替えた。切れ間なく降り注ぐ魔法の応酬は、未だ終息の気配を見せない。それらが自分たちを標的に放たれたものでないことが、不幸中の幸いだった。

弱気になっている場合ではなかった。今すべきことは生き延びることだ。この小さな同級生と二人で、この戦線を抜け出さなければいけない。

この、『大嫌い』だった同級生と二人で。

01 擬態少女は自己紹介し忘れた

いくらなんでも酷すぎる。

口を衝いて出そうになった言葉を飲み込み、私はもう一度彼にピントを合わせた。

やっぱり、酷い。その道の達人なら噴飯ものだ。玄人を自称する私から見ても、それは論評に値しない粗悪品としか映らなかった。それほど、彼の“擬態”はお粗末だった。

あれでは自分が見出し者だと吹聴して回っているようなものだ。周囲に対する配慮が、些か欠け過ぎてはいないか？

（いや、違う。あれは、初めからその気がないんだ）

黒板を背に佇む彼の姿は、険容でないにしろ、明らかに人を寄せ付ける雰囲気でもない。例えば、死期を悟った老犬のようにくすんだあの瞳は、一目で彼が“歪んでいる”ことを私に納得させた。

どうやら、彼は恐ろしく世渡りが不得手な人種らしい。それは私に言わせれば、とても頭の悪い部類に入る。ついでに、お近づきになりたくない人間にも力テゴライズされる。そして、彼がその力テゴリーに括られることは確定済みだった。

第一印象から躓いた転校生をしばし憐憫の眼で眺め、それから窓の外へ視線を移した。

距離を取ると決めた以上、彼に対する関心は持ちたくない。この憂鬱さを助長するような雨模様のほうが、幾らかマシだと思った。

しかし、結果だけ言うなら、私は彼から距離を取り損ねてしまった。

なぜなら、離れようとする気持ちそのものが、すでに彼に対する引力を兼ね備えていたのだから。

……多分。

01 擬態少女は自己紹介し忘れた。運命の日まであと三週間。

教室のドアを潜ると、幾人かのクラスメイトに声を掛けられた。各々の匙加減で簡略化された挨拶は、そのどれもが今は朝で始業前に当たることを教えてくれる。

愛想良く無難に挨拶を交わしながら、自分の机に向けて足を進める。窓際から二列目の最後尾という、立地条件としては中々の物件だ。しかし、そこに至るまでの過程に少々不満が残る、そんな准優良物件が私に充てがわれた座席だった。席替えの籤で手に入れた。ちなみに、第一志望は廊下側の、後ろから二番目の席だった。

席に着くまでの間、もう何人かと挨拶を交わす。須らく愛想良く応対すべし、と胸の中で呟きながら、柔らかな表情を心がける。こういった気配りが必要な状況が頻繁に訪れるから、窓際付近の席は未だ頭から“准”の文字が消えない。

そうこうしている間に座席に着いてしまった。学校指定の鞆を机のわきに引っ掛け、スカートを押さえながら椅子に腰掛ける。そのまま周囲を見渡すと、室内に設置された机の半分に、すでに鞆が掛かっていた。

教室内の生徒は、それぞれが居心地の良いグループに分かれ、朝の談笑を楽しんでいる。中には少数だが、どのグループにも属さず、椅子に根を下ろしている生徒も点在していた。

私が教室に入った時、真っ先に声を掛けてきてくれたのが、真ん中付近に屯している女子グループだ。今は、昨日のドラマで主役を

演じた、韓流スターの話に花を咲かせているようだ。個人的に、あの役者の何が良いのかさっぱりわからないが、普通の女の子には魅力的に映るらしい。

私は両腕を放り投げ、だらしなく机の上に突っ伏した。ああ、頬に触れる机がひんやりと気持ちいい。席に着いてしまいさえすれば、誰かに神経を使う頻度も下がる。それについては正しく優良だと思った。

担任がやってくるまで、まだ時間がある。最近まともな睡眠ができていない私は、残りの時間を仮眠に充てて過ごすことにした。

だらしなく前に投げ出された両腕を引き寄せ、その上に頭を載せる。出来あいの枕の上で、心もち顔が窓側を向くよう調整した。すると、隣の空席が目に残った。

しばし、周りに気づかれないよう、その空席を見つめる。

「どうしたのさ？　なんかテンション低いじゃん」

頭上から落ちてきた声に、内心舌打ちを禁じ得なかった。それをおくびにも出さず、瞬時に人当たりの良い表情を取り繕う。

顔を上げると、さっきまで女子グループに混ざっていた一人が人懐こい笑顔で佇んでいた。と同時に、こちらに視線を送る男子生徒に気がついた。彼は私の視線に気づいたのか、動揺を抑え込んだような変な表情を作り、自分のグループの会話に混ざり始めた。

（……ああ、そういうこと）

女子の私から見ても魅力的な容姿を持つこの少女は、背が低く、くりっとした大きな瞳が可愛い。髪の毛にかけられたウェーブは校則違反だが、童顔を気にしている本人にとっては精一杯の御洒落らしい。

確かに、想いを寄せる男子がいても不思議でないと思う。

なんか無駄な情報を仕入れてしまった。まあ、本人への密告は勘弁してあげよう。

それより、今はこの少女への対応のほうが優先順位は高い。よつて、どうでもいい情報はとっと記憶の隅へと追いやってしまう。

「おはよ」

「おはよ。って、さっきも言ったし」

私の挨拶に少女が笑いながら答えた。私も愛想笑いを返した。

「で、どうしたの？　なんか見るからに体調わるーって感じだよ」

「んー、ちよつと調子悪いっていうか」

「あ、生理？」

「おいコラ」

臆面もなく大声で何て事を、と抗議の視線を送る。しかし、少女は悪びれた風もなくカラカラ笑っていた。何一つ面白くなかったけれど、私も彼女に合わせるように笑った。

でも、近くで騒いでいた男子グループの会話が刹那だけ途切れる瞬間を、私は見逃さなかった。今は何でもない風を装って会話を続けている彼らに、聞かなかつたふりをしてくれるのはありがたいけれど、いちいち反応して欲しくない、と複雑な感情が芽生えた。男子という生き物は、どうして……。

「まあ、なんというか。ぶっちゃけ寝不足なんだよね」

「そっか。なんか邪魔しちゃったね。今度は安心して、ゆっくりお休み」

少女の物言いに、今度は自然に頬が緩むのを感じた。

私が当たり障りない返事を返すと、少女は自らのグループへと帰

還した。それを見届けてから、もう一度、机の上に突っ伏した。

普段の私なら、鞆を机の上に放り投げ、真っ先に彼女たちに合流しているところだ。たとえ会話の内容に着いていけずとも、聞き役に徹し、適当に共感を示していれば周囲から浮くこともないから。しかし。

なんか寝不足だつてさ。

そうなんだ。じゃあ、静かにしてよっか。

いや、うちらだけ静かにしてどうすんのさ。

確かに。でもさ、なんか最近付き合い悪くない？

そうかな？ もともとあんな感じだったよ。

ちよつと、ポリウム下げようよ。聞こえちゃうつて。

ええ？ もう寝てんじゃない？

（全部聞こえてるつつつの）

両腕の中に顔を埋めながら、私は小さく舌打ちした。その音は室内の喧騒にかき消され、きつと誰の耳にも届いていないだろう。

最近は自分でも上手くないな、と感じる。

何が上手くないかというと、“擬態”することが、だ。これは着ぐるみ、もしくは仮面と言い換えても良い。建前は、少し違うかな。何らかの方針を示しているわけではなく、もっと場当たりをねらったものだから。

要は状況に応じ、自分の見せ方を変えることだ。その結果、環境に適応できることを望んでいる。

私はこれを擬態と呼んでいる。

環境に適応することが擬態の主旨なら、他人と摩擦を起こすことはその主旨から外れてしまう。だからこそ、最近の私はどうにも上手くないのだ。

軋轢とまでは言わないが、交友関係に潜在的な摩擦が燻っている

感触は否めない。顕在化するほど大きくなってないにせよ、持っていて気持ちの良いものではない。

それなのに、私は擬態を洗練させるモチベーションを抱けずにした。その理由は曖昧で、未だ不透明なままだ。しかし、原因だけは明瞭だった。

視線を窓側にスライドさせる。誰もいない空席が目に入る。

教室の窓際。その最後尾に位置する座席。誰もがうらやむ優良物件。

この座席、少し前まで、毎日のように机の上に花が置かれていた。私が花を置くこともあった。そして、花が置かれるようになる以前、一人のクラスメイトがこの椅子に座って授業を受けていた。

クラスメイトの名前は、真田恭介といった。

恭介が死んでから、私は擬態する価値を見失っているような気がする。

真田恭介とは十年來の知人だった。私たちの間柄に説明書きの欄があるなら、幼馴染と記述されて差し支えない二人だったと思う。

互いに中学二年生に進級し、同じクラスになった後も、よく話していたと思う。

仲が良かった、と思う。

そんな恭介が死んだ。

病気ではない。小さな子供を庇ってトラックに轢かれたとか、そんな英雄譚でもない。原因は至って陳腐な、階段から足を滑らしての脳挫傷。

あの日、五月晴れの合間を縫うように訪れた雨が、校舎の階段に湿気をもたらしていたのだろう。彼は移動教室の最中、運悪く湿気に足を取られた、という話だ。全て人づてに聞いた話だが。

私は恭介の死に目に立ち会っていない。彼が階段の踊り場で倒れ、救急車で運ばれていた時間、私はいったい何をしていただろう。すでに特別教室に着いていたのだろうか。覚えていない。

ただ、彼が逝去したという知らせが舞い込んできた、あの瞬間だけは鮮明に思い出すことができる。

あの時、私は自室に充てがわれた一人用のベッドの上に寝転がり、恭介に宛てた御見舞メールを作成していた。内容は『災難だったね』とか『日ごろの行いが悪かったんだ』など、自分の気持ちを上っ面の毒で誤魔化した文章だった。

彼の容体は心配だったけれど、どうせすぐ帰ってくるだろう、と高を括っていた。その時になったら、快気祝いにこのメールを送りつけてやろう、そう考え、一人ほくそ笑んでいた。

だから、恭介がいなくなるなんて、夢にも思わなかった。

あの瞬間、私の心は世界から遊離し始めた。その感覚は、今も心臓に焼き痕を残したまま消えてくれない。

それから一週間、二週間、一か月と経過し、昨日で丁度四十九日を迎えた。彼の魂はすでに冥府への旅路へ赴いてしまった。

世界の流れは迅速で、彼を失った同級生達も、次第に元の笑顔を取り戻していった。ここ最近では、前日のテレビ番組を肴に盛り上がる事ができるくらいに。

同時に、真田恭介という存在が風化していく様を、まざまざと見せつけられているような気がした。それがナルシズムにより喚起された、穿った認識であることは理解していた。理解していたが、恭介がいらない日々をたゆたう私は、未だこの世界に彼の面影を探し続けていた。だから……。

抗いたくても、時間は何の感慨もなく彼の死を置き去りにし、私たちから遠ざけていく。しかし、私の心はまだ恭介に寄り添ったままだった。

故に、その心は当所なく宙に浮いている。

書きかけのメールは、削除していない。今も携帯電話の中で、送

信される時をずっと待っている。

朝の喧騒に耳を貸しつつ、自分はどの詩人だと嘲るも、口角がそれに応えることはなかった。零れ落ちた溜息も、周囲の雑音に溶けて消え、定まらない感情だけが自己主張を続けていた。

（私だけ別の教室にいるみたい）

机に突っ伏していた顔を上げる。眠る気分は霧散してしまった。枕にしていた両腕を軽く解し、乱れた前髪を整える。

一年前、とある事情でバツサリ切り落として以来、ミディアムショートで維持してきた髪型だ。けれど、今は湿気のせいだろうか、酷く鬱陶しく感じる。思い切って、もっと短くしてしまおうか。

項に掛かる髪の毛を両手で一度だけ掻き上げると、後は軽く撫でるようにしながら髪全体を指で梳いた。それを終えると、頬杖をつき、視線を窓の外に放り投げる。

灰色に覆われた世界が飛び込んできた。様々な絵の具を混ぜ合わせ、大量の水で薄めたような色だった。雨はしとすと降り続け、その雨脚に勢いはない。それらの叙景が私の内面を描いた風景画のように思えた。

どうやら、私の詩人モードは継続中らしい。そう思うと、今度こそ口角がつり上がるのが分かった。

（いつそのこと、携帯小説でも書いてみようかな）

一瞬頭を過ぎった考えを、しかし、次の瞬間には、にべもなく切り捨てた。そんなの柄じゃないから、と。それに、ともすれば冗長気味な言い回しを多用しがちな私に（こういう主張を自分とするの

って恥ずかしい)、今の気持ちを読みやすい言葉でまとめる自信もなかった。

なにより、携帯小説の主人公になるべき女の子は私でなく、もう別に存在していた。例えば、今、私と灰色を隔てるよう、窓際の席に腰掛けたこの少女など、悲劇のヒロインにうってつけの配役じゃないか。

「おはよう。起きてる?」

「おはよ。御覧の通りさ」

花にたとえるなら、桔梗、だろうか?

桔梗の花言葉は『清楚』だ。その花言葉は、この少女を表現する上で、この上なく適切な言い回しの一つだと思う。

その桔梗は、私のおどけた返答に、蕾が綻ぶような笑顔を見せた。口元につつましく浮かぶ笑窪も、この少女をより可憐に染め上げることに一役買っている。

ただ、笑顔の中に幾許かの疲労が配色されていることにも気がついた。その理由に心当たりがあるものだから、私の心は少女への同情と合わせて、雨模様を色濃くした。

しばし、少女と他愛のない会話に興じる。

昨日のドラマがどうか、あの役者がどうか、おそらく先ほどまで女子グループで話していた内容なのだろう。それらを青写真に、彼女は会話を組み立てていく。私も適当に相槌を打って、それに答えた。

不意に、少女が話題を変えた。

「なんか、お疲れ?」

私に話しかけているはずなのに、少女の視線は机の上だった。しなやかな指が机の表面を優しく撫でる。そこにあるべき残滓を愛おしむようだった。その仕草があだつぼく映り、少しドギマギしてしまふ。同時に、彼女がいったい何を求めているかを汲み取り、それを返答に含めることができた。

「まあ、四十九日だったから」

「……うん」

この少女が求めているものは、きっと私のそれと近い色をしている。そう考えての返答だったが、どうやら正解だったらしい。

処女雪のような肌にひっそりと咲いていた笑顔が、僅かに萎んで見えた。それは私の言葉に気落ちしたのではなく、蓋をしていた感情がようやく顔を出した風だった。

この少女は恭介を求めている。正確には自分が抱える彼への想いを、誰かと共有したがついていた。それは彼女と恭介の関係を慮れば、仕方ないことだと分かる。

とはいえ、こちらに気苦労が押し掛かることは変わらない。ため息を堪え、どんな話でこの子の期待に応えようかと思案した。

しかし、その気遣いはすぐゴミ箱へ投棄することになる。

「悪いけど、どいてくれる？」

傍らで発せられた低音に、一度心臓が大きく跳ね上がった。どくどく、と余韻を引きずりながら、声の発生源に目を向ける。その姿を視認した途端、私の表情は一拍もせず擬態を忘れてしまった。

背後に立っていたのは男子生徒だった。一目で雨に打たれたと分かる様相だった。

頭に被せたスポーツタオルの下から、水気を帯びた黒髪が覗いて

見える。他にも、半袖のワイシャツの所々が、生白い素肌に張り付いている様子が伺い見えた。女子と見紛う華奢な体軀が、この雨に晒されてきたのだと容易に想像できて、少々瞠目させられた。

（傘、どうしたんだろう？）

こちらの視線に気づいたのか、少年の瞳が私を捉える動きを見せる。長い前髪から垣間見えるくすんだ瞳は、デフォルトで覇気を感じさせない。そんな目を向けられた私はというと、剥き出しの表情で見つめていたことに気がつき、慌てて懇ろな顔に飾り付けた。でも、上手くできたかどうかは自信がない。

そんな胸中を知ってか知らずか、彼の視線はすぐに外され、少女がいる座席へと向けられた。

「あ、ごめんね」

言葉と間をおかず少女は立ち上がり、入れ替わるように少年が椅子に腰掛ける。彼の淀みない動作から遠慮するそぶりは一切見受けられない。それもそのはず、この座席は一週間前、転校してきた彼に割り振られた椅子なのだ。だから、遠慮する必要なんてこれっぽっちもない。

「おはよう、佐倉君。ずぶ濡れみたいだけど、どうしたの？」

たおやかな笑顔を咲かせて少女は問いかける。
それに対する少年の回答は、

「べつに」

たった三文字で遂行された。なんとも拙速な受け答えだった。と

いつか、答えてすらいなかった。

（いや、挨拶しろよ。その子おはよう、って言ったじゃん。べつに、ってなんだよ。べつに、って）

彼のおんまりな応接に、不健康な気持ちが鬱積していくのが分かった。

少女は苦笑いを浮かべ、困ったように眉根を寄せながら視線を送ってきた。普段ならそれに苦笑をもつて応えるところだが、今の私はそうしなかった。

勢いよく椅子から立ち上がる。気持ちが強すぎたせいか、存外大きな音がした。

どうやら思った以上に感情が漏洩しているらしい。近くにいた男子グループが、何かとこちらに視線を寄こしてきたが、今は取り繕う気も起きなかった。

「ねえ、向こう行こうよ」

「え？ う、うん」

私は無理やり笑顔をでっち上げ、目を丸くしている少女を誘ってこの場から離れることにした。

いつもの女子グループに合流しようと足を踏み出した時、間が悪いことに、担任の先生が教室のドアを開け、中に入ってきた。

「おーし、席に着け」

四十代半ばに差し掛かり、頭髪が些か心もとない担任のガラガラ声によって、各所で固まっていたクラスメイトたちはどんどん散っていく。

「じゃあ、私、もう行くね。佐倉君もごめんね」

少女は私と少年に一言かけると、自分の席に戻っていった。私はそれに軽く手を振って答え、少年は無言を返した。

チラリと横を見ると、少年が鞆の中身を机に収めている姿が目に見える。それを見ながら『憤懣遣る方無い』とはこういう気持ち言うのだろうか、と以前辞書で見つけた言葉を思い出し、椅子に座り直した。

出席を確認している担任を眺めながら、ふと、自分も鞆に中身が入れっぱなしだったことに気づいた。別に急ぐ理由もないので、ゆっくりと筆記用具などを机の中へ放り込んでいく。

必要なものを全て詰め終えたところには、担任の確認作業も終わっていた。点呼は取らず、欠席者を確認する穴埋め方式なので、生徒がいちいち返事をする必要はない。ちなみに、今日の欠席者は、県大会に出場している運動部の生徒たちだけだった。

ガラガラ声で伝えられる連絡事項を耳に入れながら、私は隣の少年に意識を向ける。

佐倉光太郎。

つい最近、このクラスに転入してきた男子生徒だ。

先ほどのやり取りを鑑みれば、彼の対人適応能力がどれだけ絶望的かは簡単に説明できると思う。絶望的というか、むしろゼロ。皆無。あったとしても、それは誤差。隣に座っていて、本当に同じ言語を共有しているかどうか疑わしくなる。

頬杖をつき、チラリと横目で彼の様子を伺う。

彼は連絡事項を聞いているのかいないのか、ぐずついた天気が続く窓の向こうを眺めていた。というか、被ったままのタオルは取らないのか？

その姿を盗み見ながら、私は彼が転校してきたあの日を思い返す。早々に彼の正体を看破した私は、関わり合いにならないように、と自分の中に誓いを立てていた。

案の定、彼は持ち前のコミュ力を遺憾なく発揮し、教室内にデイス・コミュニケーションの山を築いていった。結果、転校初日にして村八分という、なんとも素敵なポジションを手に入れたようだ。前述の誓いを立てた私は、当然、初めから彼に不干渉のスタンスだった。いや、不干渉のつもりだった。しかし、悲しいかな、このクラスには空席と呼べる座席は隣にしか存在しなかったのだ。

担任も級友たちも、ただ隣の席というだけで転校生の面倒を見ることになった私の気持ちを、少しは察してほしいものだ。

隣の席だから、まだ揃えていない教科書を見せることになった。隣の席だから、校内を案内してあげることになった。隣の席だから、隣の席だから……。

正直、やってもらえない。

別に我儘でそう言っているわけじゃない。それでも私は頑張ったほうだ。こと関わらざる得ない状況ならば、と最初に立てた誓いを投げ捨て、多少なりとも交流を深めようと努力した。しかし、深まったのは互いの溝だけだった。

だって、間を埋めようにも会話が成立しないのだ。これじゃどうしようもない。

話しかけても、返ってくるのは無言の相槌ばかり。たまに返事をするがあっても、先ほどのように一言、よくて二言で会話を終える。しまいには相槌すら消え失せる。こんなスタンスの男子と、どうやってコミュニケーションを図れというのか。

というか、相手は男子なんだから、同じ男子が引き受ける役回りじゃないか、これ。なんで私に御鉢が回るわけ？ ああ、隣の席だからか。

まあ、そんなわけで。今は“なるべく”関わらない方向で、心に折り合いをつけるよう努力している最中だ。

本当に、やってられない。
小さくため息を吐いた。

「……何？」

掠れた低い声を伴い、彼が振り返る。まさか反応されると思わず、一瞬心臓が飛び出たかと錯覚した。

「あ、え、ええと」

一対の仄暗い瞳に射抜かれ、私は咄嗟に反応できなかった。しかし、何か言わねばと焦る気持ちに背中を突き飛ばされ、無理やり口を開く。

「あの、べ、別になんでもな」

「そこ！ 私語は慎め」

担任から注意が飛び、私は出来損ないの笑顔を携えたまま身を固くした。

周囲からクスクスと忍び笑いが聞こえる。途端に顔面が熱を帯び、私は肩を狭め縮こまった。隣を見ると、彼はしれっとした顔で頬杖をついている。

（くう……ム力つくム力つくム力つくっ！）

心の中で呪詛を編みつつ、彼の評価をもう一段階、蹴り落とした。

担任が連絡事項を終え、日直が号令をかける。室内に弛緩した空

気が漂い、ざわめきが広がっていく。

今日は一時間目から移動教室だ。予め机の上に用意しておいた教科書の類を手に取り、椅子から立ち上がる。

「佐倉君。第一理科室だけど、もう場所覚えたよね？」

一応、面倒を仰せつかっている身なので、義務として一声掛ける。彼は無言で首肯し、私の横を通り過ぎていく。その動作の中に、こちらを見る工程は含まれていなかった。

私の感情は、もはや呆れの方が大きな比重を占めていた。軽く息をついて、外の景色に視線を移す。

「階段で転ばないようにね」

止む気配のない雨を目にしたら、何の気なしに言葉が零れ落ちた。視線を窓の外から教室へ戻す。視界には教室から出ていく生徒たちと、なぜかハトが豆鉄砲を食らったような表情で佇む佐倉君がいた。

なんか、初めて彼の感情に出会えた気がする。

「ほら、早く行こうよ」

ぼけーっと突っ立ったままの彼を急かし、教室の出入り口へと足を運ぶ。後ろから彼が追いかけてくる気配がした。

その時、何の前触れもなく、辺りが閃光に包まれた。雷だ。

そう意識した次の瞬間、地鳴りが起きたような轟音が響き渡る。

「キャアッ！」

雷に反響するように、教室に残っていた数人の女子生徒が悲鳴を上げた。私はというと、生憎、雷程度で悲鳴を上げるような可愛らしい肝っ玉は持ち合わせていない。

とはいえ、不意を突かれたこともあってか、鼓動が鳴りやまない胸に手を当てながら、不意打ちに弱いのかな、とどうでもいいことを考える。

ふと、彼はどんな表情をしているのだろう、と気になった。振り返ると、彼の顔にはいつも通りの能面が張り付いていた。ただ、しきりに自分の右手と窓の外を見比べている。どうしたんだろう？

「どうしたの？」

気になって尋ねてみる。

彼はしばらく同じ動作を繰り返した後、私の方に向き直る。そして、一言も言葉を発することなく、教室を後にした。

要するに、無視された。結果、置いてきぼりを食らう私。頬を引きつらせ、一つ、大事なことを思い出す。

(……ああ、そうだった。“なるべく”話しかけないんだった。そう決めたんだった。そうだった。忘れてた。私としたことが)

なぜだろう。笑えてくるのは、なぜだろう。

「……にやろっ」

おおよそ女の子の口から出たとは思えない声色で、その言葉は呟かれた。もちろん、私の声だった。

というか、いつまでタオル被っている気だろうか？

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0836y/>

右手から雷を出そうとしたら異世界にトリップした

2011年11月26日21時49分発行